

資料 2 - 3

伊吹山における開発・利用の現状

1. 鉱業

石灰岩は日本で唯一自給できる地下資源であるが、伊吹山は品質・埋蔵量ともに優秀な石灰石鉱山であるとともに、東海・近畿・北陸を結ぶ拠点にある利点を活かして、長い年月にわたって開発が進められてきた。セメントのなかった時代において、消石灰は火山灰や粘土と混ぜて、漆喰塗りの材料として用いられたが、記録では伊吹山の石灰岩の開発は、寛文元年（1661年）までさかのぼることができる。正徳3年（1713年）の記録では、太平寺で石灰岩が採掘されている。江戸時代には肥料としても利用されている。明治以降においては、輸送力・需要の増大と相まって、大清水や藤川でも採掘されるようになった。

ここまでの採掘は比較的小規模なものであったが、戦後に入って昭和26年6月、伊吹山の南西斜面において大阪セメント(株)伊吹工場の原石山として開発着手されて以降、山容に大きな変化が生じるような規模で石灰岩の採掘が行われている。事業区域面積は1,068.97haで現在まで約120haを開発している。なお、平成15年に伊吹工場が休止してからは、滋賀鉱産(株)が主として骨材の原料としての採掘を年間約100万t行っている。

また、伊吹山の弥高においても、昭和24年4月に近江鉱業(株)の原石山として開発工事に着手され、半世紀以上にわたり石灰岩の採掘が行われている。

2. 観光

昭和40年7月、山麓から山頂部までの17kmにわたり有料自動車道路の伊吹山ドライブウェイが開通した。伊吹山ドライブウェイの終点には約400台を収容できる駐車場が整備され、そこから山頂までは3つの遊歩道（西遊歩道、中央遊歩道、東遊歩道）が整備されている。このようにお花畑へのアクセスが極めて容易であるため、年間約30万人の利用がされ、観光地化している。山頂には、観光客を対象とした売店、休憩所およびトイレが立地しているほか、大正7年から平成13年まで稼働していた气象台の跡地がある。

また、山麓から山頂まで登山道伊吹山線が整備され、年間約3万人が登山をしている。

山腹1合目から5合目にかけては、昭和31年に近江鉄道(株)により、伊吹山スキー場が建設され（現在は「ピステジャポン伊吹」としてピステジャポン(株)が経営）、年間約3万人の利用がされている。スキー場では夏期においてもパラグライダー発着場として利用されている。

3. 砂防工事

大富川は、伊吹山の南西斜面中腹の標高821mに発し、高低差654mと県下でまれにみる典型的急流河川である。明治29年以来、度重なる洪水で荒廃し、山地の大半が禿地となり、

沿岸住民の恐怖の的であった。大正 6 年に全域が砂防指定地に編入され、以後、昭和 60 年まで、地元住民を中心に延べ人数 45 万人が関わって、砂防工事を行った。

なお、この工事の進捗に伴い、洪水は抑制されるようになったが、一方で、大富川の石灰転石を利用した沿川の石灰工場が廃業に追い込まれ、昭和 19 年には流下転石もなくなり、全工場が閉鎖された。